

## 2026年3月1日 四旬節第2主日「世を愛される神さま」

冬のオリンピックが行われていました。活躍する選手たちの姿を見て、私は思いました。

「どうしてあれほどの力が出せるのだろう。」「どうしてあれほど高く、速く、強くなれるのだろう。」

しかし私たちは知っています。そこには気が遠くなるほどの、長い努力があり、厳しい訓練があります。また練習をずっと続けるために、多くの支えと多くのお金が必要です。この険しい道を勝ち抜いたわずかな人だけが、表彰台に立ちます。どの世界も、努力して競争に勝って、認められてようやく価値が認められる。そんな仕組みの中で動いているように見えます。

今日読まれた福音書の中で、ニコデモという人が、夜を待って、イエスさまのもとを訪ねました。彼は立派な人でした。学もあり、地位もあり、人々から尊敬されていました。けれど彼は思ったのです。

「この先生の教えを受ければ、私はさらに神に近づけるのではないか。」

もっと上へ。もっと確かに。もっと神さまに近づこう。彼はその思いで来たのでしょう。

しかしイエスさまのお答えは意外でした。

「はっきり言うておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」

はっきり言うておくは「アーメン、アーメン。」これはイエスさまが、本当に大切な事を言われるときに使われる言葉です。

ニコデモは、努力して上がっていく道を考えていました。しかしイエスさまは、上に登る話をなさいませんでした。「新しく生まれる」と言われました。自分の力で上がるのではなく、神から新しく生まれる。それは、自分の努力でつかみ取るものではありません。

神さまが与えてくださるものです。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。」ヨハネ3章16節です。

神さまは、立派な人だけを愛されたわけではありません。勝った人だけを選ばれたのでもありません。

「世を愛された」とあります。

この「世」には、迷っている人も、弱っている人も、失敗した人も含まれています。

私たちも、その中にいます。人は年を重ねると、何事も若いころのようにはできなくなります。体も思うように動きません。記憶も弱くなります。病氣もします。そして日々できないことが増えていきます。

しかし神さまの愛は、私たちの能力によって決まりません。何が出来るかによって、私たちは愛されるわけではありません。神さまは、「できるから」ではなく、「あなたであるから」愛してくださいます。

パウロは言いました。

「一人の人によって罪が入り、一人の方によって恵みが満ちあふれた。」

私たちは失敗します。間違えます。後悔もあります。けれどそれ以上に、キリストの恵みはあふれています。

私たちが神さまに近づいたのではありません。

神さまが私たちに近づいてくださいました。

それが、イエス・キリストです。

「水と霊によって生まれる。」霊とは、風のことです。風は見えません。けれど確かに吹いています。神さまの霊も、目には見えません。けれど私たちを生かしています。神さまの愛は静かに、しかし確かに、私たちを包んでいます。

四旬節は、自分の力を誇る時ではありません。神の愛に立ち返る時です。

「私は十分ではない」と思うとき、神は言われます。

「あなたは、わたしの愛する者だ。」

努力が足りないと感じるときも、過去を悔いるときも、神さまの愛は変わりません。私たちは、すでに愛されています。だからこそ、安心して神さまに向き直ることができます。

世を愛された神さまの下で、私たちは今日も生かされています。競争に勝たなくても、人に認められなくても、神さまは私たちを知っておられます。そして言われます。

「あなたは、わたしの大切な子である。」

この言葉を胸に、四旬節の歩みを続けてまいりましょう。アーメン